

はじめに

口腔機能低下症と口腔機能発達不全症が新たな保険病名として採用されてから、6年が経過しました。その間に歯科医師・歯科衛生士国家試験の問題にも含まれるようになり、これからは卒前教育の段階から口腔機能管理について学ぶ世代がどんどん輩出されることとなります。これは、う蝕や歯周病の予防・管理に加えて、生涯にわたる口腔機能管理が求められているということだといえます。

また、2024年の診療報酬改定における口腔機能低下症に関する新しい流れとして、歯科衛生士が口腔機能管理にかかわる教育・指導を行うことに加算が設けられました。これは、歯科衛生士が口腔機能管理に主体的にかかわることが今後強く求められていることを意味しています。

口腔機能の些細な不具合の重複が、低栄養やフレイル、サルコペニアのリスクを高めることが近年の研究でもあきらかになっています。オーラルフレイルの概念も新しくなりました。「食べる楽しみ」や「人と人とのつながり」など、QOLの根幹をなす口腔機能へのかかわりは、かかりつけ歯科医院では必須となるでしょう。

この書籍は、口腔機能低下症にこれから取り組もうとする歯科医師・歯科衛生士に向けて、歯科衛生士の目線で執筆しました。本書が、皆様の臨床のお役に立てれば幸いです。

小原由紀